

藤間柳庵西浦賀の高丘に登る

—「太平年表録」と「嘉永六年 黒船来航絵図」を読む—

平山孝通^(*)

はじめに

令和2年(2020)はコロナ禍で、公民館など全ての市の施設は公開講座や見学会などが中止となり、多くの市民の生涯学習を受ける機会が影響を受けてしまいました。それを補う一つとして、YouTubeによる「ちがさき動画ライブラリー」を配信している施設が多くあります。対面に比べての効果に疑問視する向きもありますが、まずはできることからノビリと進めて行きましょう。

その様な中、茅ヶ崎ゆかりの人物館でも同年6月10日より「茅ヶ崎ゆかりの人物館オンラインギャラリー」の配信を開始しました。高田耕安と茅ヶ崎、作家開高健と茅ヶ崎、二人のリーダーと茅ヶ崎—伊藤・山宮、腰掛神社と日本武尊、藤間柳庵って何者？、藤間柳庵と黒船来航、国木田独歩と茅ヶ崎、独歩の二つのエピソード、企画展の紹介、開高家の一こま、源頼朝と茅ヶ崎、登山家榎有恒など、2、3分の動画を流しました。適宜、写真や資料を挿入し、画面の下部にはテロップを流して解説の補足をしています。視聴するのは数分ですが、編集には数時間かかります。文化生涯学習課と人物館の担当の方々のご努力に感謝いたします。

令和3年3月28日現在、視聴回数は8,300回を超えています。短い解説が功を奏したのか、講座の開催を期待されていたのか、思わぬ成果が得られました。ゆかり館には対面の講座もオンライン配信も両方あると倍楽しい、と考える市民が増えると、これほど前向きなことはありません。この状況下で考えたことや体験したことを新たなゆかり館の糧にしたいと考えています。ある熱心な郷土史愛好家から、提示した写真や資料の問い合わせを頂きました。「黒

船来航絵図」と独歩に献呈された『二十八人集』に興味を覚えた方が多くおられました。

今回は、「茅ヶ崎ゆかりの人物館オンラインギャラリー」で数カットしか紹介できなかった「黒船来航絵図」を読みすすめてみましょう。

1 藤間柳庵とは

「黒船来航絵図」の解説の前に、浦賀でヘルリ（ペリーを当時この様に表記しています）来航を実見した柳島村（現茅ヶ崎市柳島）の藤間柳庵に触れましょう。

本名は、藤間善五郎、「柳庵」とは、菩提寺である柳島の善福寺の墓碑銘に「筆名・柳庵」と刻まれることなどから、揮毫を頼まれたときや私的な記録や随筆などに記すペンネームのようなものです。柳庵は享和元年（1801）5月5日に生まれて、明治16年（1883）4月10日に82歳で亡くなっています。柳島村の名主職を務め「農業を業として、商船を巡らし」て、柳島～浦賀～内海（現東京湾）～江戸の間を往復していました。

柳庵は『年中公触録』、『太平年表録』、『雨窓雑書』などを著しています。これらは『茅ヶ崎市史史料集』（茅ヶ崎市発行、2集、5集、7集1、2、1999、2007、13、14）として刊行されています。『太平年表録』（公孫樹舎、2007）と『雨窓雑書』（同、08）は「復刻版」も刊行されて、柳庵の筆跡を味わうこともできます。

『太平年表録』は嘉永6年（1853）から明治5年（1872）までの政治・外交・社会を記録したものです。西浦賀の高丘から「遠鏡」（遠望鏡）を使い「ヘルリ」（ペリー）の黒船を見えています。また、安政2年（1855）10月の「安政大地震」における柳島や寒

川付近の建物被害の様子や「つなミ」(津波)を危惧する描写には興味を覚えます。柳庵が心配した津波は幸いにして柳島には襲来しませんでした。村人はホッとしたことでしょう。地震即津波と当時の人々も知識の一つとして持っていたのです。安政3年12月の藤沢の遊行寺における外交官のハリスの目撃など幕末の歴史的場面が甦ってきます。「大河ドラマ」の脚本の様な材料がたくさん遺されている著作といえます。

藤間家には江戸で購入したものでしょう。帰り船には肥料や塩などとともに運ばれたと思われる三代歌川豊国を中心とする400点を超える浮世絵が所蔵されています。浮世絵の鑑賞は柳庵の楽しみの一つだったのでしょう。柳庵が手にした浮世絵は、貴重なコレクションとして茅ヶ崎市美術館で保管され、その全貌は『相州茅ヶ崎柳島 藤間家所蔵浮世絵全覧』(公孫樹舎、2013)で全点カラー印刷で鑑賞することができます。「初代河原崎権十郎」、のちの九代目市川団十郎の浮世絵が20点近くありますが、もしかして柳庵は初代河原崎権十郎の贗品だったのではと想像を逞しくします。柳庵の没後13年目の、明治29年(1896)に、松林村字小和田浜須賀に6,000坪余の別荘を構えた九代目市川団十郎は、時に小和田の海で趣味の釣り糸を垂れています。その昔、「初代河原崎権十郎」を描いた浮世絵を積んだ藤間家の400石船が江戸から柳島湊に向かって小和田の沖合を急いでいたとは、露知らず、ことでしょう。

柳庵の母は広川村(現平塚市)、妻は岡田村(現寒川町)から、藤間家に嫁いで来ました。柳庵の長女の婿は一之宮村(現寒川町)から婿入りしています。また、父方の叔母は鵜沼村(現藤沢市)に嫁いでいます。これらの交流は名主などの村役人の通婚圏などを考える参考事例といえます。

なお、柳庵は、昭和55年(1970)に「神奈川の100人」に選ばれました。同58年、没後100年を記念して、地元の柳島八幡宮境内に「藤間柳庵之碑」が建立されました。撰文は川城三千雄氏(浜見平、市文化財保護委員・市史協力員などを歴任)、揮毫は茅村水越咲七氏(高田、前衛書家、元小学校長)です。撰文と揮毫の依頼は柳庵の玄孫(5代の孫)雄

蔵氏の岳父である茅ヶ崎郷土会の重鎮であった野崎薫氏(萩園、会長・市史編さん委員などを歴任)と柳島自治会の尽力によるところが大きいようです。

2 柳庵、「友を得て」浦賀へ走る

まずは、藤間雄蔵氏が編集された『太平年表録』の復刻版(史料1参照)で、柳庵の筆跡を鑑賞し、ヘルリ来航の状況を眺めてみましょう。

次に、『茅ヶ崎市史史料集 5』「翻刻版」をみてください(史料2参照)。

その8頁上段、「三 善五郎(柳庵)の浦賀実地見聞記、及びペリー上陸の状況」を読んでみましょう。解題の143頁も参考にしましょう。船の長さ、巾などの数字は概数です。

ヘルリ艦隊が、浦賀沖合に投錨したのは嘉永6年(1853)6月3日の夕方(4時~5時頃)のことです。「誰からの情報か」定かではありませんが、黒船来航との情報を得た柳庵は、黒船の投錨3日後の6日にさっそく行動に出ました。

柳庵は、6日に藤沢で友と合流して彼の地、浦賀へ向かいました。友とは誰でしょう。叔母が鵜沼に嫁いでいることなどから類推して、藤沢宿付近には友がいたのでしょう。その夜はどこかに一泊して翌日の7日には西浦賀の高丘へ登って、遠鏡(遠望鏡)で辺りを一覽したところ**亜墨利加船**(アメリカ船)4艘が見えたのです。びっくり仰天でしょう。亜米利加と記すこともあります。米を「墨」と記しています。墨の様に真っ黒な船ということでしょう。船体には防腐剤として、タールを塗っているのでも黒く見えるのです。4艘の内、2艘は**小船**で船べりの左右に窓を開けて、鉄炮(砲)の筒先が見えています。威嚇しているのでしょう。小船の長さで巾が記されています。2段にした割り注があります。長さ40間余(72.7m)、巾12~3間(21.8~23.6m)ほどです。他の2艘は**大船**で**黒船**です。鉄炮の窓と翼車(外輪、水車の車の部分の様なもの)があります。船の上は屋台の様で、火の見台の様なものがあり、ことごとく白く、たとえるならば、雪の中の城郭を眺めるに等しい感じがします。ここにも割り注があります。長さ60間余(109.1m)、巾18~9間(32.7~34.5m)、

蒸気船という、とあります。以下は長い割り注です。此船が進もうとするときは、石炭を焚いて左右の翼車を回します。其の速いこと一時（いっとき、は 2 時間）に 20 里（78.5 km、時速 39.3 km）を走り、煙りは黒雲の様です。次に「別に此図あり」とあります。

「此図」とは、どの様なものでしょうか。

『太平年表録』にかつて、綴られていたのかもしれませんが、現在藤間家には見当たりません。柳庵は遠望鏡で見た状況を図（絵図）にしたのでしょうか。『太平年表録』に纏や陣羽織の絵を遺している柳庵は、絵の心得があったのでしょうか。

根拠の全くない想像ですが、冒頭の「予、6 日藤沢より友を得て」の友とは、絵師ではないかと、絵師とはいわずも絵心のある、今ならカメラ技術を持っている友ではないのでしょうか。柳庵の傍らで筆を走らせて黒船などを写し取っていたのかも知れません。また、今日まで多くの「黒船来航絵図」が伝わっていますが、柳島へ帰村後、絵師が描いた図を入手したのかも、と想像は膨らみます。

柳庵が、浦賀を離れたあとの出来事は「以下、他聞を記せり」とあり、人聞きの資料を記しています。よって「此図」も後日入手した可能性もあります。

藤間雄蔵さんも生前、「此図」を探していましたが、発見には至りませんでした。古文書整理がほぼ終了し、目録も完成した今日では発見は難しいことでしょう。しかし、「此図」が数枚と仮定するならば藤間家に伝わる写本、漢籍、和書、法帖などに挟まれている可能性もあります。いつか「此図」を手にしたいものです。

3 黒船来航絵図（仮称）

そこで、柳庵の「浦賀実地見聞記」を理解する参考資料として「茅ヶ崎ゆかりの人物館オンラインギャラリー」で一部を流した「黒船来航絵図」で、4 艘の黒船及びヘルリ上陸の状況などを眺めてみましょう。柳庵の「此図」とはこの様なものだったのでしょうか。

「黒船来航絵図」（長さ 321.5 cm、幅 27.5 cm、墨一色）と仮称を付けましたが、絵図には、「嘉永六丑

年六月三日申ノ下刻相州浦賀津エ入船北亜墨利加ハシトン船十四日メニ浦賀エ入津スト云」とあります。船は船の異体字です。

「嘉永 6 年、1853 年の丑年 6 月 3 日（新暦 7 月 8 日）申ノ下刻（午後 4 時～5 時頃）に、相州（相模国、現神奈川県の一部）の浦賀（現横須賀市浦賀付近）の津（入江・港）へ北亜墨利加（北アメリカ）船が入港した。ハシトン船 14 艘にて浦賀へ上陸した」。ハシトン船とは何でしょうか。端船ではないか。また、14 日ではなく、14 艘と、第 7 図の下段の浜辺に向かって碇泊する「アメリカ船、14 艘」を参考に仮定してみました。

令和 3 年(2021) 丑年から 168 年前の大騒動です。

図ごとに解説しましょう。

●第 1 図

1 人目の人物は「上士官」です。第 2 図の冠で区別します。冠は「赤青黒猩々金緋金ビョウ」と派手です。上着は「黒ラシャ（羅紗）」、ズボンは「白モ、引（股引）」、沓は「黒羊革ヤハラカ（柔らか）」です。背丈より高い銃剣を右手で保持し、囊（バッグ）を交差させています。

2 人目の「先防戦士」の冠物は地味で、腰には「（腰差）短筒」を帯びています。1 人目と同様に、銃剣を保持し、囊を交差させています。

3 人目は「隊長」で、冠物には「紅トリノ尾羽」の飾りが、上着は「黒ラシャ」、釦は 7 つ、ズボンは「白キメ（キヌ？、絹）」、沓は「黒羊革」です。前方に構える抜き身の劔（サーベル）の柄は「鮫（かわはぎ）」の皮に「金」の装飾、鞆は「シンチウ（真鍮）」です。頬に髭を蓄えています。

4 人目も「同」じ隊長で、冠物からみて 3 人目の「隊長」より上位と思われます。抜き身の劔を右肩に傾けています。頬髭があります。

●第 2 図

役職や地位による 7 種類の冠物が図示されています。

「上士官」、「戦士」、「水主冠」です。次は名称がなく、「通シ役人トモ見ユル者冠之」とあります。軍人以外の普通の、通常の、役人の冠物でしょうか。「隊長」、「同、紅トリノ尾羽」、「士常冠」は士官の

日常の冠物でしょうか。「沓」は1種類で、「黒羊革ヤハラカ也」とあります。沓は役職や地位に関わらず同じ物を履くのでしょうか。第1図の4人の沓は同じ物に見えます。

次は楽器です。「大陣太鼓」は「胴ニケモノ、モヤウアリ（胴ニ獣ノ、模様有リ）」、「渡二尺程（直径60.6 cm）」、「胴薄板」、「大ハチ（撥）革（製）」とあります。「小陳（陣）太鼓」は「ワタリー尺程（30.3 cm）」、「小バチ鉄（製）」。

名称は記されていませんが、シンバルンの様なもの。当時日本にはなかった楽器か、名称の写し忘れでしょう。

「小笛」はトランペットの様なものでしょうか。「同」はクラリネットの様なものでしょうか。材質は「シンチウ（真鍮）」です。「大笛」は「惣シンチウ」とあります。

次は武器です。「小笛」の上に描かれている「腰差短筒」は拳銃です。革（製）のケースにベルト。銃の「スクチ」（銃口）と「台尻」が見えます。「カルフ」とは「カフス?」、釦でしょうか。第1図2人目の「先防戦士」が腰に帯びています。

●第3図

「劔（サーベル）」の柄の部分は「鯪（かわはぎ）」と「金」で装飾され、鞘は「シンチウ」。紐が2本垂れています。

「端船」は舳、はしけ、カッター、上陸用舟艇です。柳庵は「扁舟」と記しています。「長三間程（5.5 m）」。「テフツカイ（チョウツカイ、蝶番）、カチトリノクサリ（舵取りの鎖）、カイ穴（櫂穴）」。「カイ」は「長サ一間半ホト（2.7 m）、至テ平薄シ、革ニテ巻」とあります。「端船碇」は、4本爪です。

次は、端船の走行時の様子が想像できる図です。「将自ラカヂヲトル図（舵を取る図）」です。「ヒヲ、ヒ（日覆い）」は「モメン（木綿）」で、前方で12人の水主がカイを操り、後方には9人の戦士が銃剣を携えて乗り込んでいます。将校が船尾で舵を操ります。冠物が書き分けられ、水主、戦士の区分が明瞭です。

●第4図

蒸気船です。黒船ですが、黒の着色がないのが残念です。右上から順に見てみましょう。

蒸気船 長サ四十五間(81.8 m)、横三十二間(58.2 m)
帆 船 長 三十 間(54.5 m)、横二十二間(39.9 m)
大炮(砲) 前後六挺、玉 六寸位(直径18.2 cm)
石火矢(小型の大砲) 廿八挺(28挺)

人数(乗組員) 五百人

車湯烟(煙) ニテ廻ル、焼物石炭

右下から順に見てみましょう。

イカリ鏡(碇鉄)、日ヲ、ヒ羊皮(日覆い羊皮)、水入赤シツクイ(漆喰)、黒チャンヌリ(黒色のタールを蒸留した瀝青、チャン塗り)、車鏡、車渡り五間(直径9.1 m)、横一間程(1.8 m)、板ヲ、ヒ黒(板覆い黒)、大将之営(ヘルリらの部屋)、入口、船印赤白(船尾に星条旗が翻っています)。

中央の煙突から石炭を焚く煙が立ち登っています。蒸気船は大量の石炭を消費するので、石炭節約のために、風があれば帆を張り、風を捉えて帆走します。煙突の前後に帆を張る柱が描かれています。石炭は貴重品だったのです。蒸気船にとって、石炭の補給地として日本は最適な位置にあったのです。

●第5図

「アメリカ人久里浜上陸行軍之図」です。

惣人数五百余人。柳庵の「見聞記」には「蒸気船より人数四百八十人を繰出し、十八艘の扁舟に打乗上陸する、其行列六十人を一伍として八組にわかち、各黒白の着服なり、腰より以上黒腰より以下白、中には総首(隊長)二人は十八人の伶人(楽人)を左右に随い、音楽に応じてしづゝと帷幕の中に入れて面謁、冠頂異形の礼服なり、筐中の捧書左に」とあります。

先頭は小太鼓、笛、シンバルン。隊列の右側に星条旗(白赤)が翻り、士官(冠物で区別可能です)が数人続き、隊長3名は抜き身の劔を持って隊列の左を固め、戦士は劔筒を肩に担ぎ、隊列を組みます。次に、「呈翰猩々緋ニテ包ミ童子二人持之」(日本国将軍に呈する合衆国大統領の書翰を真っ赤な絹布に包み、童子2人が之を持っています)、次は、惣大将のヘルリ(権威付けのためにか大きく描かれ、劔を腰に帯びています)。続いて、大太鼓、戦士が劔筒を肩に担ぎ、隊列を組みます。抜き身の劔を持つ隊長が隊列の左に見えます。

●第6図

「久里浜陳(陣)推荒増之図」です。久里浜における浦賀奉行の陣(軍勢)の進み方の荒ましを窺うことができます。

ヘルリ方惣人数五百余人の戦士に、幕府方は惣人数一千百有余人で対峙します。

先頭は並旗、太鼓、浦賀御奉行(井戸石見守)の同心五十人、武器はケン筒(劔筒)五十挺。西洋流砲術指南役・下曾根金三郎が馬上で指揮を執り、その与力が武器十匁六挺(士筒、さむらい筒と呼ぶ威力絶大な口径18ミリ前後の火縄銃)で続きます。

家紋「九曜」を染めた幟旗を先頭に、戸田伊豆守(浦賀御奉行御助力)の先手、武器は三匁五歩廿挺(口径13ミリ前後の火縄銃)と十文目六挺。戸田の物頭や目付が馬上提灯を腰に差して指揮を執ります。「九曜」の旗と纏、そして馬上の戸田伊豆守が続きます。

井戸石見守の先手、キノコ状の差し傘、武器は三匁五歩二十挺が続きます。井戸の物頭が馬上提灯を腰に差して指揮を執ります。家紋「六星」を戴く纏と馬上の井戸石見守が続きます。

先手とは先に立って戦うことや戦う人を、また、敵に先んじる攻撃を指します。物頭とは足軽部隊の頭(隊長)で、足軽の弓矢隊、鎗隊、鉄砲隊などを率いる人です。目付とは士卒の監視や戦場での士卒の働きを観る人です。

なお、柳庵の「見聞記」には「御大将(井戸石見守)には錦繡之陣羽織を着用、士卒は陣笠に白きたすきをかけ、抜身の鎗に火縄附の鉄砲を携へ、亜墨利加人の上陸を俟たりける」とあります。

●第7図

「久里浜陳(陣)営之図」です。陣営とは軍隊の留まる所、陣屋のことです。

上段から見てみましょう。

六月九日朝辰ノ下刻(午前8時~9時頃)

アメリカ人上陸

呈翰御請取於上段

戸田伊豆守 井戸石見守 床机

アメリカ人惣大将外ニ 隊将三人 キョクコウ
本朝人数 三千余人

彦根侯陳(陣)営：天幕に彦根藩井伊家の家紋「丸に橘(彦根橘)」が、旗印は赤の井桁、纏、次に侍大将(軍を率いる侍)を先頭に手勢が続きます。

御奉行陣営：天幕に戸田伊豆守氏栄(うじよし)の家紋「九曜」と井戸石見守弘道の家紋「六星」が染められています。応接所は2張、長サ廿間(36.4m)、ヨコ六間(10.9m)と(長サ)十三間(23.6m)、横六間です。奥の応接所の前垂れには「六星」が見えます。応接所の脇には「九曜」の旗と2本の纏にそれぞれ「九曜」と「六星」を戴いています。旗が2本。手前の応接所の両脇に御奉行手勢が控えています。応接所を囲む幕の入り口に、並旗、ヤセン筒(野戦筒)、それを指揮する下曾根金三郎がいます。

川越・忍両陣営：天幕に家紋の「葵」、その前には旗(白紋赤)と纏。数人の侍大将と手勢が続きます。

浜辺に目を移します。番船六十八艘、警備の船です。旗などが掲げられています。アメリカ船十四艘(端船、第3図参照、柳庵は十八艘と記しています)、番船四十七艘。アメリカ船を降りた一行五百余人(第5図参照)は、小太鼓を先頭に、浜辺から点線の様に幕の中に進んだのです。

●第8図

最後の図です。右上が、久里浜(現横須賀市久里浜付近)。東に進むと灯明崎があり、彦根持灯明台(彦根藩井伊家が持ち場とする台場)があります。旗と纏が見えます。北には、浦賀奉行所の御番所、船小屋があります。入江には番船が数艘係留しています。向かい側は、新台場で石垣が組まれています。

その北は、西浦賀でその高丘で柳庵と友は、遠鏡(とおめがね、遠望鏡)で、沖合に4艘の黒船が停泊する正にこの情景を目の当たりにしたのです。

2艘の蒸気船は黒雲の様な煙を上げています。沖合には、旗艦サスケハナ(257feet、78.4m)と汽走艦ミシシッピ(225feet、68.6m)、2艘にそれぞれ星条旗が翻ります。ミシシッピの左右に2艘の帆走艦プリマス(147feet、44.8m)とサラトガ(150feet、45.8m)が並んでいます。

観音崎は河(川)越持です。旗と纏、数艘の番船が見えます。サル嶋も川越持で、同様に旗と纏が見えます。石垣が組まれています。

ショウニヨウ寺（称名寺、金沢文庫）は米倉持、六浦藩（金沢藩）の米倉丹後守が警備しています。旗だけが見えます。

本牧（現横浜市中区本牧付近）は細川固です。熊本細川藩（細川越中守）が警固し、旗と纏が見えます。3軒の家屋が描かれています。

4 最後に

「黒船来航絵図」を読むことによって、柳庵が目の当たりにした嘉永6年（1853）6月の浦賀の情景を追体験した気分になりました。

最近得た情報をお伝えしてまとめとします。

それは藤田英昭氏の「徳川慶勝「諸品新聞書」に関する一考察ーペリー来航・異国関連図像の紹介を兼ねてー」（『金鯢叢書』47、徳川黎明会）です。

以下は、藤田論文を要約します。

ここまで、読み進めてきた「黒船来航絵図」と同様な絵図が、尾張徳川家の「諸品新聞書」にありました。それは、尾張徳川家14代藩主徳川慶勝が収集したペリー来航や異国関連の図像を貼り付けたものです。

尾張徳川家の江戸家老竹越正富の嘉永6年8月2日付け徳川慶勝宛書状に次の記述があります。竹越が浦賀奉行所のある与力が描いたアメリカ人久里浜上陸に関わる図を、「浦賀へ参り合居候者より借り申候間、写取御慰に奉入御覧候」というものです。

「アメリカ人の行列」、「浦賀奉行の備えの様子」、「蒸気船の図」を浦賀奉行所のある与力が描いていました。その後、浦賀へ出向いてその図を手に入れた者いました。その図を竹越が借りて、名古屋の慶勝の慰みのために（誰かに命じてか）写し取ったのです。

それから類推して、読み進めてきた「黒船来航絵図」は、浦賀奉行所のある与力が描いた図が原図で、それを誰かが写しました。それを次ぎ次ぎと写した何枚目かの絵図と考えられます。

まずは、ヘルリに遭遇して、その状況を描いた与力に、それを次々と「写取」った絵師に感謝します。図を藩主徳川慶勝に提供した家老竹越正富、それを大切に保管した慶勝、藩主と家老の関係を研究され

た藤田英昭先生に感謝します。

そして、その論文を機転を利かせて筆者に紹介した茅ヶ崎市史編さん担当の塘瑞希さんと小鮎結子さんに感謝します。

多くの人によってヘルリ来航の顛末が伝えられたことを実感した資料整理となりました。『太平年表録』を繙き、幕末から明治初期の激動の茅ヶ崎を、柳庵の筆を通して振り返りたいものです。

参考文献

◎大口勇次郎・藤城憲児・武田庸二郎『茅ヶ崎市史ブックレット17、柳島村名主藤間柳庵その生涯と文芸』茅ヶ崎市

◎藤城憲児「ペリー再来時の柳島」『古文書購読学会報』6 平塚市博物館古文書講読会

◎藤城憲児「柳島村名主・藤間柳庵の肖像画」『ヒストリアちがさき』12 茅ヶ崎市

◎平山孝通「藤間柳庵及び藤間家研究文献目録（抄）ー茅ヶ崎市史文献目録（40）ー」『ヒストリアちがさき』9

◎平山孝通「ペリー艦隊の「蒸気船」と煎茶の「上喜撰」ー藤間柳庵「米里幹百人一首」ほかを参考にー」『文化資料館調査研究報告』26 茅ヶ崎市文化資料館

◎久保有生・富永富士雄・白沢礼子「民俗資料館「旧藤間家住宅」の敷地内の構成とその特徴について」『文化資料館調査研究報告』28

◎山本博文・藤田英昭ほか『ペリー来航歴史を動かした男たち』小学館

◎『増訂武江年表（全）』図書刊行会

謝辞、今回も文化資料館の須藤格学芸員、三谷恭子学芸員に大変お世話になりました。動画ライブラリーの企画を推進した文化生涯学習課の高橋知氏、加藤広樹氏に感謝します。

※1 茅ヶ崎ゆかりの人物館学芸員

惣勢

勝田 次郎

合三十九万六千余人

石火矢六十挺

大筒六百挺

長柄一万三千筋

日車臺附三百挺

鉄炮六千五百挺

ノ口セ 百三十本

予六日藤澤より友叔へ彼地へこえ一泊して翌七日西浦賀へ兵を送り遠鏡

観望し一瞥をもちり亞墨利加船四艘也

其内二艘小艇より一々左右一室板あけ

鉄炮の筒先より中（中十ニミナリ）二艘ハ大艇又

一々黒船あり鉄炮の意を翼車と

由一帯船上屋根の如く大の見様の類

こゝろへ向 聲は雪中城郭を馳

まゝ初こ （中六十万余） 勢を氣に船を唱ふ （此船）

（中十八万） 右四度と替りて左右の翼車或は （此船）

めづらしき一船より一時は二十里と走りて煙臺をのぞき （此船）

園あり其のれハ浦賀住居の市々噪動して

中内の難より或は遠く馬よりあるに

色つ又い馬を二送りて少は甚し （此船）

常陸役取より是は城傳止し （此船）

人衆の強き思ひ （此船）

兵士物をもみ取ずハり最三より敵宿せり （此船）

以下如所を記せり九日九里濱へ備場筑け構

ありて帷幕を張り出動し方々様は

宮田源兵衛井伊掃部隊 （惣勢）

大津源兵衛招平 戒丸 （千七百人）

浦賀より井戸石見守 （口）

日守助力 戸田伊豆守 （口）

大津大將の錦浦陣羽後城着周士平ハ

陣望より白きるをうけ援手の鎗

大津陣の鉄炮観望し亞墨利加人の上陸を

候より （此船） 岸より船より人衆四百人全

操り十八艘の扁舟より打撃を陸より

行列を二十人を一伍として八組より

名黒白の着振あり （此船） 中より揚音

二人を十八人の伶人成左は長ひ音楽は

応へてまづと帷幕の中より入て西郷

冠頂異形の禮装あり選中の指書左

合衆國伯理爾天德書翰和解

北亞墨利加合衆國伯理爾天德ノシルラント

鉄炮六千五百挺

ノロセ百二十本

三 善五郎の浦賀実地見聞記、及びペリー上陸の状況(六月)

予、六日藤沢より友を得て彼之地へこえ、一泊して翌七日西浦賀高丘へ登り、遠鏡を携へ一覽するに、亜墨利加船四艘也、此内二艘ハ小船にして左右へ窓をあけ鉄炮の筒先ミゆ

長四十間余也、二艘ハ大船にして黒船なり、鉄炮の窓と翼車ミ

ゆ、一帯船上屋形の如く、火の見様の類ことくく白し、譬

ハ雪中城郭を眺むにひとし、長六十間余蒸氣船と唱ふ、〔此船進ま

んと欲するときは、石炭を焚て左右の翼車をめぐらす、其疾き事一時に

二十里を走すると云、煙り墨雲の如シ〕別に此図あり、しかれハ浦

賀住居の市輩噪動して家内の雑具をはこび、或は遠く馬に負

ハせ、近郷又ハ縁者へ送る、其沙汰甚しければ、当御役所よ

り是を停止すといへとも、折に人氣の騒立忍びかたし、予焚

蒸の氣候に怕れ、取敢ず八日夜三更に帰宿せり

自是以下他聞を記せり、九日久里浜へ備場を御構ありて帷幕

を張、御出勤之方々様にハ

宮田御陣屋 井伊掃部頭 惣勢 二千三百人程

大津御陣屋 松平 誠丸 同 千七百八人程

浦賀御奉行 井戸石見守 同

同御助力 戸田伊豆守 同

十萬石 伊豆守様御本 戸田采女正 同 千人余之由

ミノ大カキ 家ニ付御加勢之由 右御大将にハ錦繡之陣羽織を着用、士卒ハ陣笠に白きたすき

をかけ、拔身の鎗に火繩附の鉄炮を携へ、亜墨利加人の上陸を俟たりける嘗、蒸氣船より人数四百八十人を操出し、十八艘の扁舟に打乗上陸する、其行列は六十人を一伍として八組にわかち、各黒白の着服なり、腰より以上黒、中にも総首二人は腰より以下白十八人の伶人を左右に随ひ、音楽に応してしづくと帷幕の中に入て面謁、冠頂異形の礼服なり、筐中の捧書左に

四 合衆国大統領より日本国將軍宛書翰

合衆国伯理爾天德書翰和解

北亞墨利加合衆国伯理爾天德ノ○シルラント○セルモウレ、書ヲ 日本国帝殿下ニ呈ス、予今マ、水師提督○マツテウセ

○ヘルリヲ以テ書ヲ殿下ニ呈ス、此ノ者ハ即チ合衆国ノ海軍第一ノ將ニシテ、今次殿下ノ領地ニ航到セル一隊軍艦ノ總督

ナリ、貴国ノ政廷ニ対シ極メテ懇切ノ情ヲ合スルコトヲ告明セシメ、且タ今次○ヘルリヲ日本国へ遣スハ他ノ旨意有ニア

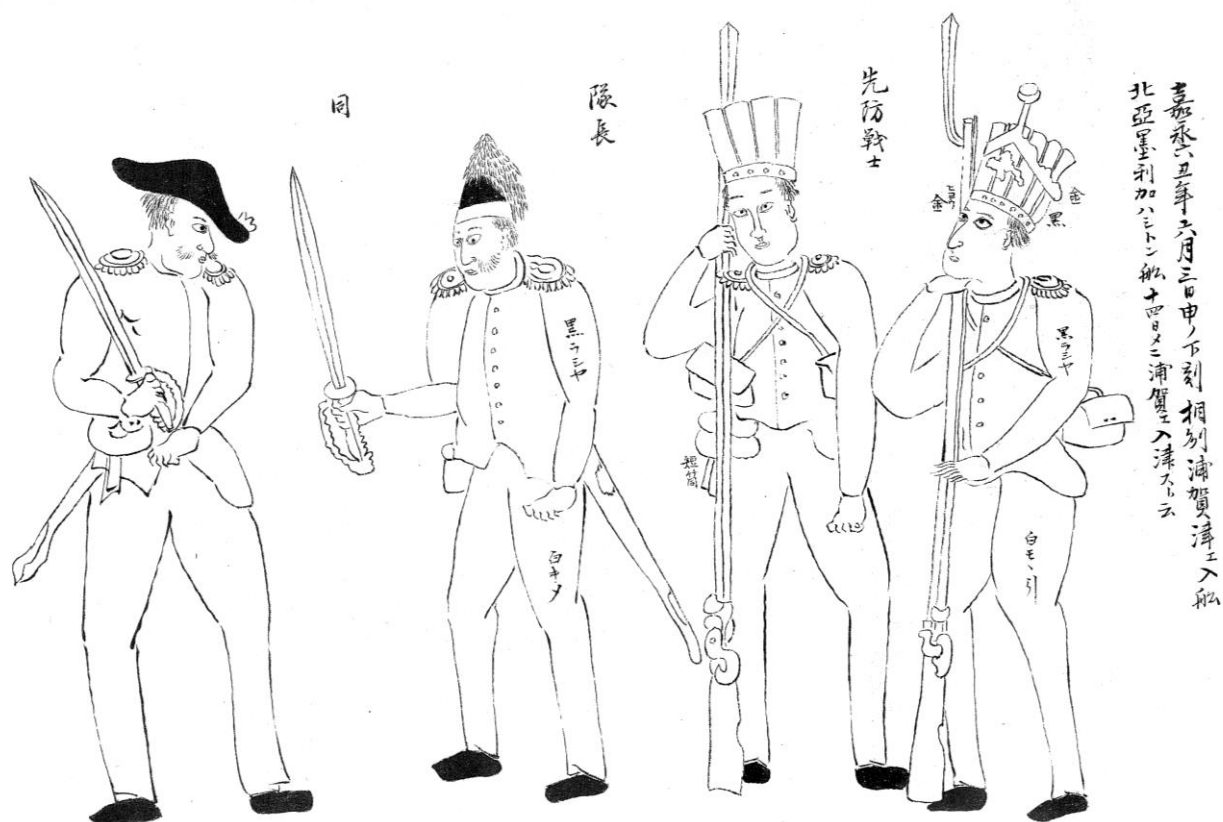
ラズ、唯我カ合衆国ト日本ト宜ク互ヒニ親睦シ、且ツ交易スベキ所ナルヲ告知シメント欲スルニ有ル而已、合衆国基律ハ

固ヨリ其ノ民人ニ禁戒ヲ下シ、他ノ国民ノ教法ヲ妨ル事ヲ得ザラシム、予時ニ水師提督○ヘルリニ命シテ是レ等ノ事ヲ嚴

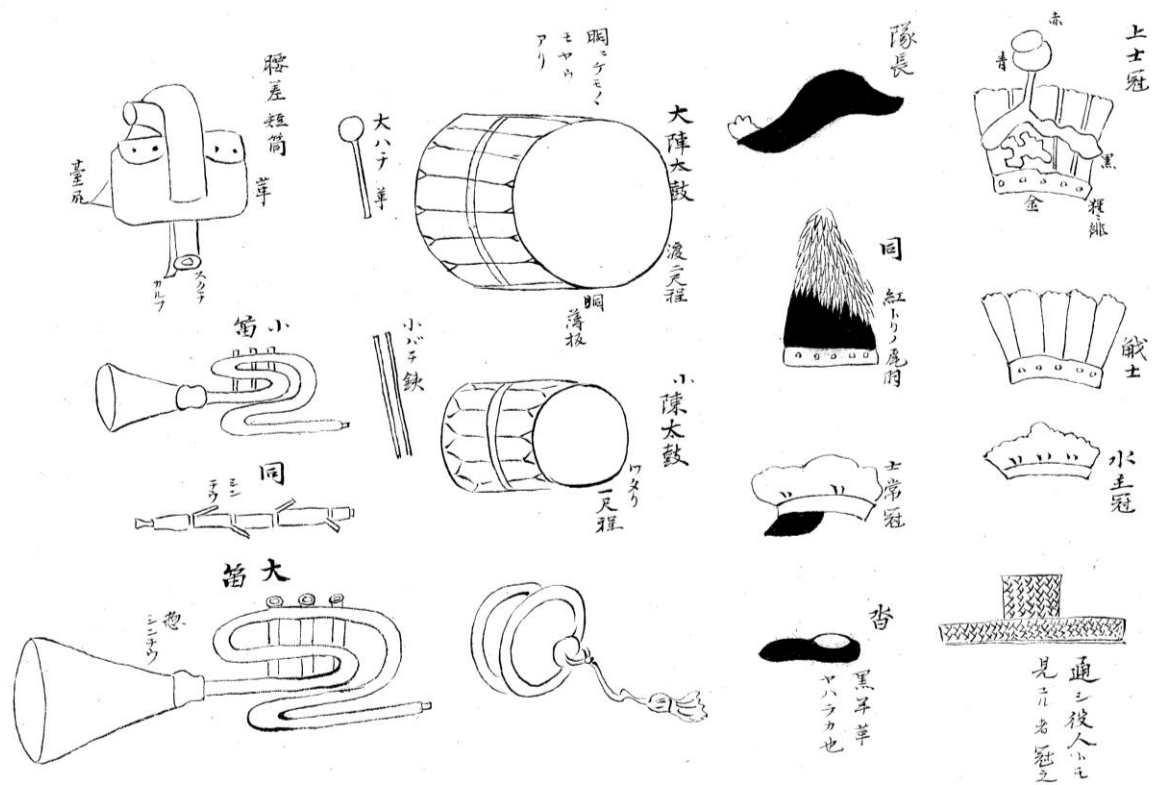
禁セシム、是レ貴国ノ安穩ヲ妨センコトヲ欲シテナリ

北亞墨利加合衆国ハ大西洋ヨリ大東洋ニ達スルノ国ニシテ、就中其ノ○ランコン州及ビ角里伏爾尼亞ノ地ハ正シク貴国

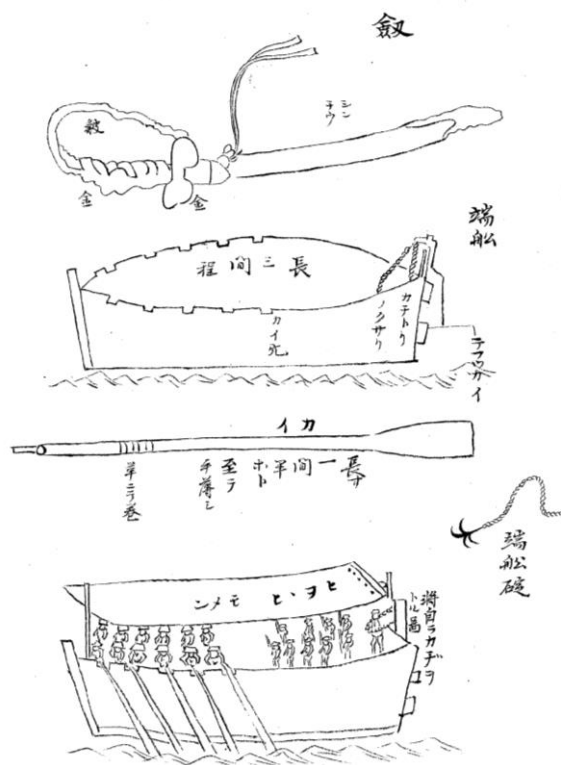
ト相ヒ対ス、我カ蒸氣船、角里伏爾尼亞ヲ発スレバ十八日ヲ



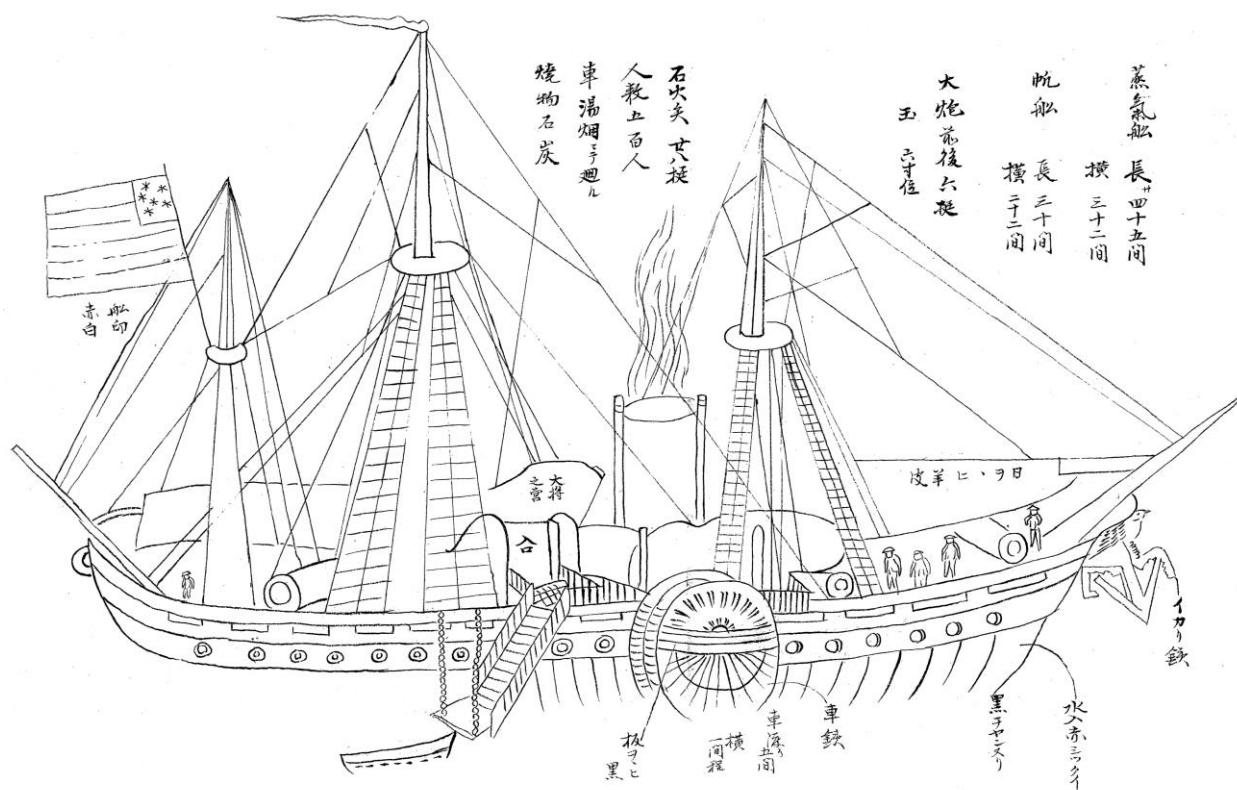
第 1 図



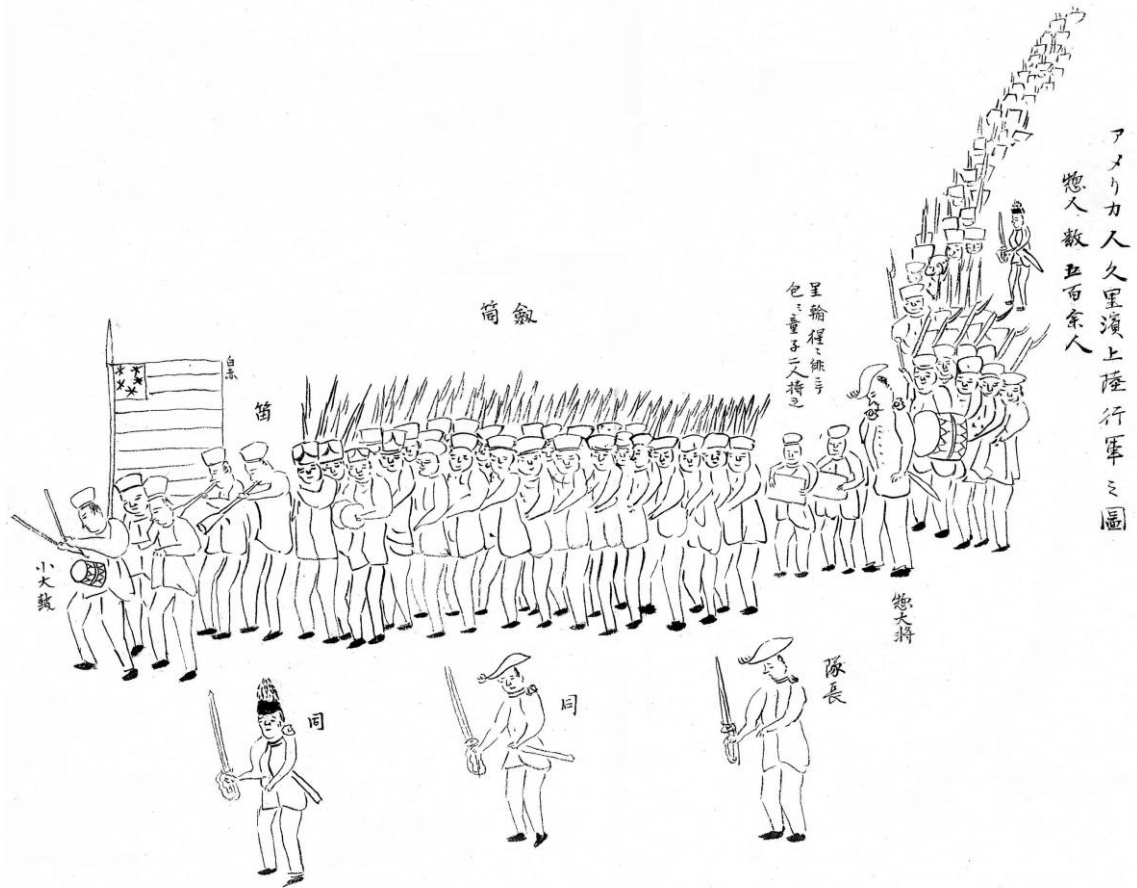
第 2 図



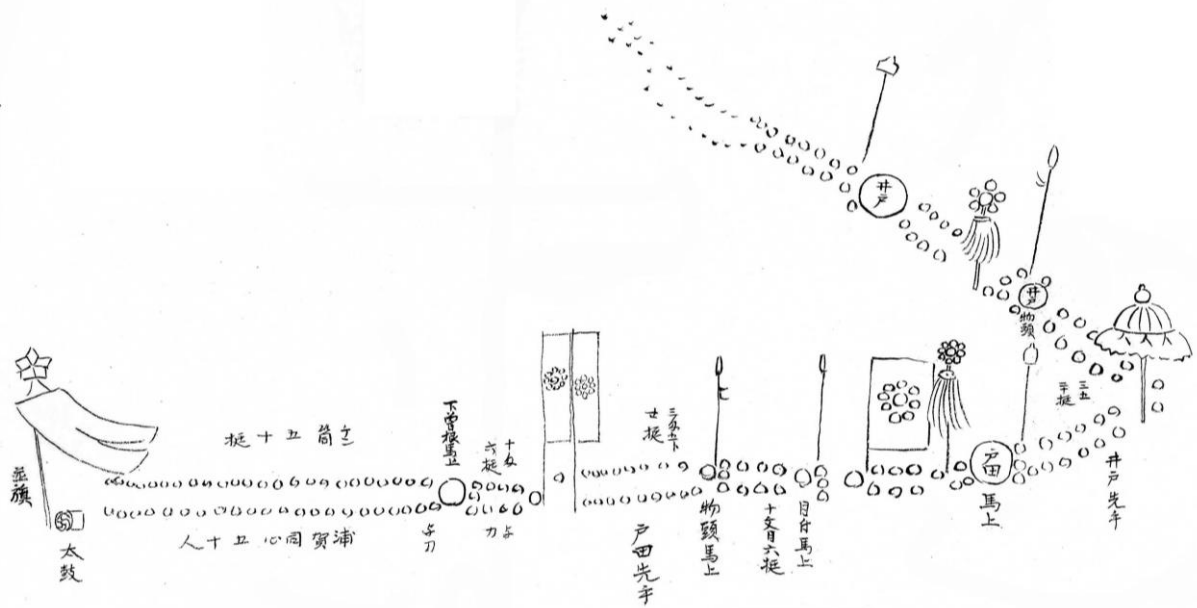
第 3 図



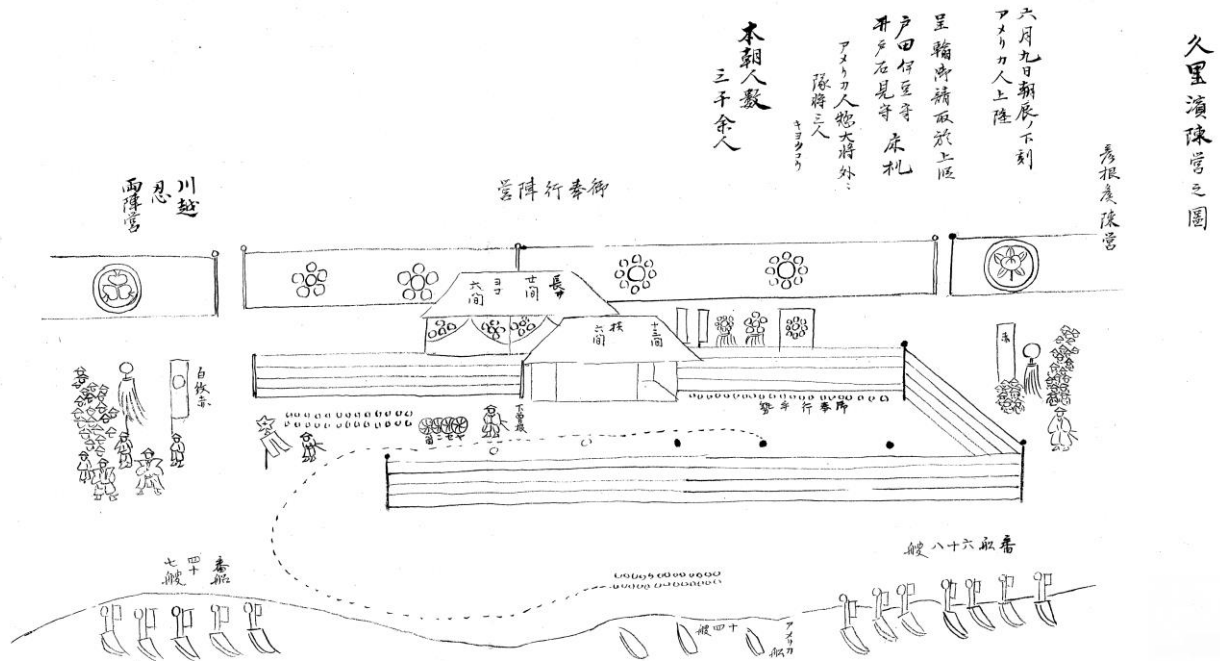
第 4 図



第 5 図



第 6 図



第 7 図



第 8 図